



94歳の母里津子さん（左）に大きな声で話しかける森谷康裕さん。食品雑貨店を営みながらの介護が続く＝東京都葛飾区、仙波理雄撮影

少女のよらかな目の母と

孤族の国

第一部 男たち

6

居間のかもい、親類入りの賞状が並ぶ。米寿の祝いなど贈られた「寿状」は、亡父あても含めて3枚。94歳になるベッドの上の母を、静かに見下ろす。

介護保険で、最重度より一つだけ軽い「要介護4」。週1の訪問入浴を済ませ、おぼつかない手つきでコップを口元へ。「あ、こぼすよ」と慌てて近く長男を、少女のよめに澄んだ目で見つめる。森谷康裕さん(66)は父が逝った10年前から、母里津子さん(94)と2人きりで暮らす。東京都葛飾区にある築30年の木造2階建てで小さな食品雑貨店を営む。昨年、母の左太ももの骨折がわかったが「もう治せない」と医者に言われ、ほぼ憂

父が作るきんぴらや煮豆は評判で、年の瀬になれば自家製の「お節」を買いに来る常連客を、親子3人でさばいた。30歳過ぎで見合い結婚したが、1年足らずで破綻した。「サラリーマン家庭みたいに決まった休職が欲しいと言われても、ね」。時代は流れ、街は変わる。駄菓子店がなくなり、主婦は消費期限が過ぎたバックの惣菜をむよむよになら。常連客は老い、店の前を通り過ぎる人々は向かいの駐車場付きスーパーへ買い込まれていく。忘れられた店のような商店の陳列棚に品物は少なく、閉店セール最目玉のようだ。森谷さんはほとんど外出せず、毎日3度の食事を作らず、母に食べさせ、おむつを替えて寝かしつける。自身の弟(58)が週2回は顔を出すが、妹たちはあまり来ない。「旦那や孫の世話で忙しいんだろ。ため息も出る」。2人の時間は、10年前から止まっているかのようだ。だが、母は卒寿を過ぎ、自分も高齢者と呼ばれる年齢に達して、同じ病院に通う。10年後、一体どんな暮らしが待っているのか、考える余裕はない。「車いすにさえ乗せられれば、日帰りでも連れ出してやるんだけど」。そう言いながら、2年前の飛行機の写真を手に取った。機内の窓を背にした母は、少し不安げに、こちらを見つめている。

息子介護の本音 言えた

残業を終えて帰宅すると、母は出走直前の競走馬のような目をしていて、明け方まで続く徘徊の前兆だ。「向こうに行ってるっ」。思わず頭をたたくと、みるみるうちに白髪が鮮血に染まった。急いで病院へ。「次は通報します」と医師は言った。数年前のことだ。

鈴木宏康さん(51)は独身で、アルツハイマー型認知症を患う92歳、要介護3の母を介護する。川崎市の築30年を建てた分譲団地の4階、3LDKで2人の生活を続ける。電機メーカーの下請け会社を辞めたのは46歳。リストラに行ってるっ」。思わず頭をたたくと、みるみるうちに白髪が鮮血に染まった。急いで病院へ。「次は通報します」と医師は言った。数年前のことだ。

「気になる親がいる」というケアマナへの訴えで様子を見に来た。片時も落ち着かぬ母の横で、ふてくされてたばこを吸い続けていると、集まりに顔を出して、とっしと誘われた。足を運ぶうち「本を書いたらどうですか」と、2人きりの閉じられた空間に、少しずつ新しい空気が入っていく。日記を書いたこともないのに真夜中、パソコンに向かってた。2009年、単行本「息子

介護を出した。つたなくも過激な表現で、孤立無援な日々には正気を失い、かける心算をつづる。「自分自身の人権なんて言ったら、介護なんてできない。一日にいく度か心の中で殺すのです。お袋を」単行本は顔を呼んだ。周囲の親をみる無難の独身男性の「本音」を聞きたいと、介護者や行政担当者らが続々とやってくる。介護関係者の会に誘われることも増えた。鈴木さんは気が向くと、母を連れて、そんな会に参加する。「十バカラに行く方がいかに決まっています」などと憎まれ口をたたきながら、(高橋美佐子)